

1. 今回の研修における目的やねらい

「開発とは？開発教育とは？その可能性は？その教育的意義は？」自分は「開発教育」という概念が確立していない時代に教育を受けた世代の一人であり、さらに自身の不勉強も重なり、全くの開発教育初心者である。事前研修では開発教育に興味関心がある教員志望の大学生や、開発教育を実践している教員などに逢い今や開発教育は学びの主役になり得る存在になっていることに衝撃を受けた。一方学校現場は多忙を極め余裕がない教員たちと学ぶ意義や目的を忘れ、学ばされている子どもたち。本来の教育理念が現場では生きていないのではと感じつつも目の前の子どもたちのより良い成長や学力向上のためにと情熱をもって真面目に仕事に邁進している同僚は数多い。開発教育はそんな現場で子どもたち自身が学ぶ意味を、もっと言えば生きる意味を感じられる格好の材になり得るのではないか。その可能性を追究したいと思いこの研修に臨んだ。

先述のように学校は忙しく常に時間に追われており、熱心に教育に取り組むが故に教員は視野が狭くなりがちである。児童が保護者以外で身近に接する一人の大人として、また知識や教養を授ける立場の大人として、人間的に豊かで魅力的でありたいし、少なくとも常に学び続け自らを高める姿は示したい。様々なことに興味関心をもち自らの視野を広げ見聞を広め続ける自分でありたい、そんな思いもこの研修に参加する目的の一つであった。

また、今回事前研修で JICA タンザニアの友成次長の講話を伺った。その内容が大変貴重だったのはもちろんだが、友成次長の仕事に対する思いの深さややる気、バイタリティ等オーラをひしひしと感じ、その輝きに感激すると同時にこのパワーの源はいったい何であろうかと漠然とした疑問をもった。今回開発の現場タンザニアの現状、支援の現状、そして現地の方や日本の方々の生の声を見聞きすることで、タンザニアという国がそれとも開発が、いったい何がパワーを与えるのか、人々は開発についてまたタンザニアについてさらに日本について何を感じ思っているのだろうと「タンザニアに関わる人」についての問いと答えを見つけたいと思った。自分が実際にタンザニアへ行き何かを感じ、行った者だからこそ分かる何かをつかんで子どもたちに伝えられたらと考えた。被支援国の現状と共に、そこに関わるいろいろな立場の多くの人々の思いも開発教育に欠かせない要素ではないかと考えるのである。私は JICA の方々や専門家、隊員の方々のように開発に直接携わることはできないが、その思いに触れることを通し、社会の一員として、教員として、自分にできる開発、支援とは何か、そしてそれは学校教育として取り組むべき価値がどのくらいあるのか考えるきっかけをつかんできたいとこの研修に参加した。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

今回タンザニアへ訪問しタンザニアという国を感じたこと、タンザニア人に逢い交流し意見交換して支援の実際を見聞きしたこと、在タンザニアの様々な立場の日本人の方々の話が伺えたこと全てが自分にとって何にも代え難い大変大きな財産となった。また、このタンザニア訪問で地球に生きる仲間、共に生きる一員として、仲間や課題を知り、考え、自分にできることを行動しようという意欲態度を育てる開発教育は、現代社会を生きる我々、特に将来を担う子どもたちにとっては避けては通れない、重要課題であると改めて認識できた。机上の学習やインターネットの情報も必要だろうが、本物に触れ感じ体験することの大切さ、本物だからこそ

分かることがこんなにも多いのかと痛感した。本物には感動があり魂がありロマンがあるのだ。本物に出逢い、視野を広げ世界を学ぶことで、日本や自分を知ることができる。正にそんな体験をさせてくれた研修であり同じことを学校教育の場で行っていきたく強く感じている。

3. タンザニアから学んだこと

まずは自分自身のアフリカ、タンザニアやタンザニア人に対するイメージ、先入観、偏見が実際に足を踏み入れたことで大きく覆されたことである。机上の学習やネットを通じて得られる膨大な情報による先入観を越えて現実には刻々と変化し偏った見方は役には立たないと教えられた。人々は明るく穏やかで礼儀正しい。タンザニア人もそこで生きる日本人もまちな国も希望に満ちているようで生き生きしている。百聞は一見にしかず。見た物感じたことをあるがままにまずは受け止めることが大切であろう。

タンザニアの都市ダルエスサラームは日本のと同じような都会であった。ビルも道も電気も水も車もそして交通渋滞も。しかし一歩郊外へ出れば、電気や水に不自由する村が点在していた。しかしそんな村で暮らす人々の表情は明るく、身なりもきちんとしていてやせ細る人もおらずとても幸せそうである。遠い異国からの訪問者をどこでも親切に温かくもてなしてくれた。村の人々はより良くなろうと力を合わせ助け合っている。目が合うとだれでもどこでも手を挙げて笑顔で挨拶してくれる。小さな子はニコニコと近寄ってきて楽しげである。経済的に豊かな国日本ではこんな笑顔にあまりお目にかかれないような気がする。我々日本人が忘れかけている人と人との温かい繋がり、そして経済的に豊かではない中の幸せ感等、タンザニアには目に見えて確かに存在した。人の幸せとは…考えさせられた。

一方ダルで暮らす足立さんからは最近の経済発展による便利さと引き替えに、今まであった良さが失われつつあることを実感するお話もいただいた。豊かになることの負の面である。経済発展は便利さ快適さをもたらすが、それまで大切にされてきた物と引き替えに格差や犯罪、人間の欲を生んでしまうことを感じていらした。ある日本人の方は「日本と同じ過ちをしないように発展して行ってほしい」と言っていた。経済的な豊かさに価値をおく日本とは違う価値観をもつタンザニアの人々は、先進国の失敗を教訓にこれからどんな選択をしていくのだろう。興味は尽きない。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

今回得てきた様々な材をどのように子どもたちに還元していけばよいか、まだプランが立てられていない。自分が得たこと感じたことを如何に効果的に子どもたちに伝えていくか、熟考していきたい。ただ、タンザニアに行ったから「タンザニアを学ぶ」のではなく、「タンザニアで開発を学ぶ」よう心がけるつもりである。子どもの思考の流れに沿って、自然にかつ子どもたちの心にしっかりと足跡が残せるような取組ができたらと思う。

また子どもたちだけでなく、教職員にも機会を捉え開発教育の有効性、必要性を伝えていけると考えている。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

良かったことでまず挙げられることはいろいろな方との出逢いである。タンザニアの人々、在タンザニアの様々な立場の方々、JICAの方々、そして今回11日間を共に過ごしたみなさん。私にとってはこれらの出逢いは宝であった。

次にO&ODというプロジェクトについて深く学べたことである。一見地味で小さなプロジェクトであるがその本質は国家にとって非常に重要な人材育成に関わる部分であり、時間がかかるけれどもだからこそ尊い、心ある日本の支援を象徴するようなプロジェクトであるように受け取った。

私はこのプロジェクトを学び、それに関わるタンザニアの人々に出逢い、人生をかけている専門家の存在を知り、ある面逆境と言える中、気高い志をもって取り組んでいる JICA スタッフの思いに触れ、日本という国をまた日本人をより一層誇りに思った。遠いタンザニアへ足を運び何日もかけて支援の最前線へ行き話を伺ったからこそ得られた気持ちだと思う。この研修を実現させてくださった多くの方々に心から感謝したい。世界を知ることにより、日本が見えてくる。日本の子供達に世界の現状と日本の行っている支援の確かさ尊さを伝え日本の良さを感じてもらいたいと思う。

6. 海外研修での役割（日直や各担当）を振り返っての感想・提案など

会計系の仕事は、事前の準備にかかった費用を調べ精算することと、現地での昼食、夕食についての集金・支払いが主な仕事だった。現地では一度に十日分を集める方法も考えたが、リスクの分散ということで毎日一人3万シリングを集める方法をとった。十分足りて集めなくてよい日もあれば、足りなくなり次の日に補填する日もあったりしたが、概ねスムーズに運んだ。支払いの際はお店の方と一緒に支払額をチェックすることを心がけたので大きなトラブルもなくほっとしている。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

これほど中身が濃く質が高く素晴らしい研修は他にはないと感じる。これをどのように子どもたちに返していけばよいか、大きな宿題である。O&OD プロジェクトのように、日本の子どもたちが自ら開発に携わりたくなるような気持ちを、今年1年だけではなくこれから長い時間をかけて育てて行くこと、それがこの研修に対する恩返しになるのだと思っている。そしてそれが自分にできる国際貢献、支援の一つなのだとも思う。それぞれお忙しい中研修に関わってくださった皆様一人ひとりに心からお礼申し上げたい。ありがとうございました。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

海外へ研修に行く前に自分のテーマが決まっていたならば、それに向けて、どの場所で何を見て、聞いて来れば良いか見通しがつき、準備もしやすいのだと思います。そういった準備はしておく方が良いと思います。ただ、テーマが定まる前に出発という方も多いのだと思うので、その場合は、様々な可能性を考えて、できるだけたくさんの方にアンテナをたてて情報を得るよう努めるといいのではないのでしょうか。行ってしまえば何もかも新鮮で本当にあつという間の10日間でした。これだけは見てこよう、ここではこれは聞いてこようこうしようという気持ちの準備、ある程度の自分なりの計画が学びを深くするように感じます。

9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(日) -12日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	これからの研修に向けての期待で気持ちが高揚し、長い移動時間も苦にならず。アフリカの大地に降り立ったとき、見渡す限りの平地を見たときの感動は言葉に代えがたいものであった。
8月12日(月)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	空港からダルエスサラームへ向かう道路は渋滞でなかなか前へ進まない。交通渋滞？ここは本当にアフリカ？横断歩道でもないのに道を横切る人、物を売りに来る人、黒い肌に色鮮やかな服、携帯電話で話す人、みんなエネルギーでぎらぎらしている。目が合うとにっこりとあいさつ。手を振ってくれる人も。どの人もどこか温かい。

		JICA 事務所で大西所長にご挨拶する。研修に対し激励をいただき身が引き締まる思いがした。
8月12日(月)	本日の振り返り	JICA 事務所の方との夕食会は和やかな雰囲気の中、丸尾さんの「日本の間違いを繰り返さないよう示唆していきたい」、大西所長の「世界のどこへ行っても先輩方がやってきた確かな日本の支援のお陰で、日本と言うだけで温かく接してもらえる」というお話が心に残った。ホテルにもどりタンザニアの第一印象を自分なりにまとめた。
8月13日(火)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	たくさんの方に様々な視点からタンザニア事情について話を伺った。中でも木全次長が熱く語ってくださった O&OD プロジェクトについてのお話は既習の事柄をさらに掘り下げる物で自分にとって大変勉強になり、翌日からのマセユ村訪問への期待がますます高まった。
8月13日(火)	モロゴロへ移動	移動のバスから見える郊外の様子は、タンザニアの多くの人々の生活を表していた。ダルエスサラームとの違いがバスの中からもいろいろな所で見取れた。どこへ行っても成人男性が座ってのんびりしているのはお国柄なのかと感じる。経済的に豊かには見えないが困っているようにも見えない。みんな幸せそうに見える。
8月13日(火)	本日の振り返り	一人一人感じる事が違い視点も違うことがおもしろい。日本との違いに目がいきがちだが同じ所も敢えて見ていこうと思う。
8月14日(水)	Maseyu 村 Mazizi 地区 Maseyu 村 Mjini 地区 サイト視察	いよいよマセユ村人と対面した。マジジ地区への移動の際道路は整っておらず嵐の中の小舟さながら車は上へ下へ激しく揺れた。これがタンザニアの道だ。小学校視察を経て煉瓦銀行視察、アマニグループに昼食をごちそうになる。
8月14日(水)	専門家との懇談会	田中専門家と柿崎専門家のお話は大変刺激的であった。タンザニアに根を下ろし、人生をかけて現地のために尽力されている方の言葉は重く尊い。「困っている人がそこにいるのに助けられない理由はない」という言葉。心を打たれた。
8月14日(水)	本日の振り返り	気づいたことを述べ合い、インタビューについて打ち合わせをした。時間通りに行かないことを踏まえ、「これだけははずせない」質問を考えておいた。
8月15日(木)	Maseyu 村 Mjini 地区 関係者インタビュー	互いに自己紹介をし、日本について簡単な説明をした。村人は真剣に聞いてくれ、メモまでとる人まで。説明が終わると質問を受け、その資料を是非村の小学校へ置いて行ってくれとお願いされた。プロジェクトの効果なのか村人の学ぼうという意欲の高さややる気を感じた出来事だった。グループに分かれたインタビューではどの人も真剣に質問に答えてくれた。今必要な物は教育と応える人が多かったこと、O&OD プロジェクトは自分たちにとってそれ自体が教育であり、効果も感じていて、生活を変えられる気がしていると評価していたことが心に残った。

8月15日(木)	小学校視察、村人との交流	マセコ村の小学校は女性の先生が多く、整っている印象がした。ただ就学前教育の教室はなく屋外で学習をしていた。簡単な地球儀でタンザニアと日本の位置を確かめるとどの学年の子も目を輝かせていた。子どもはどの国も変わらないなあと嬉しかった。村人との交流は素晴らしい経験だった。現地の人と一緒に楽しい時間が過ごせたのがとても心に残っている。
8月15日(木)	市内視察（モロゴロ）	安全上の理由から団体で行動した。それでも街の息づかいを感じることができ感激だった。特に市場は見る物全てが新鮮だった。
8月15日(木)	隊員との懇談会	赤堀隊員と翌日の打ち合わせを兼ねて食事をとった。赤堀隊員ともっと深い話をしたかったが時間の都合もあり難しかった。赤堀隊員は女性ながら異国の地で活躍されている。このような立派な方に逢うと同じ日本人として私にできる国際貢献とは…と考えさせられる。
8月15日(木)	本日の振り返り	マセコ村で得たことを共有し合った。また翌日の交流について確認した。それぞれ感じたことがいろいろあり、興味深かった。もっと聞きたかったし話したかったが、疲れもあり集中をかいてしまうことも…この研修は体力勝負だなと感じる。
8月16日(金)	ムグラシ中等学校 赤堀隊員	教室で生徒たちと交流する。赤堀隊員の教室は他のと少し雰囲気の違い、こどもたちの表情が軟らかい。日本の紹介や習字、新聞紙で兜づくり、折り紙など時間が許す限り交流させてもらった。タンザニアの子どもも日本の子どもと同じ。学校という空間も然り。タンザニアは年長者や教師を敬う習慣があり交流していて非常に心地よく感じた。校庭に出て全校の子どもたちとも交流。子どもたちのパワーに圧倒され気味だった。練習していったマライカの歌は古い歌らしく、子供達と一緒に大合唱という希望は叶わなかった。少し残念。赤堀隊員の様々なご配慮のお陰で素晴らしい交流となり心から感謝している。
8月16日(金)	ミクミ国立公園通過 モロゴロへ移動	野生の動物との対面。みんな童心に返り、動物を見つけるたびに大騒ぎ！キリンは3点、シマウマは5点…ポイントをつけポイントに執着する輩も。野生の動物と共存できるタンザニア、素晴らしい。
8月16日(金)	本日の振り返り	中学校での交流にみなさん興奮していた。ただ改善点や課題も見つかり、次の交流で修正しようと話し合った。
8月17日(土)	バガモヨへ移動	途中警察に車の整備不良を理由に止められるなどハプニングもあり。それもタンザニアと受け止める自分の意識の変化に少々驚く。バガモヨの協会写真撮影の際身なりの整った私立の小学校の一団を見かける。初等教育から英語を使っている学校らしい。村の小学校とずいぶん違う。ここにも格差を見ることができる。

8月17日(土)	市内視察（バガモヨ）	測量技師の加藤隊員、環境教育の谷口隊員に案内して頂き市内を視察した。ダルのように危険はあまりないらしく団体行動ではあるが、緊張せずに市内を歩けた。地元の人しか来ないであろう眺めの良い喫茶店に連れて行ってもらい景色を満喫した。また有名な音楽グループの演奏を聴きに行った。そこで聞かせてくれたお礼にとマライカとふるさとを歌ったところ、一緒に歌って躍ってくれ素敵な時間を共に過ごすことができ感激だった。
8月17日(土)	本日の振り返り	ロッジのレストランで夕食をとった。加藤隊員や谷口隊員が現地にとけ込み尽力している様子や現地の方々の様子をお聞きできたことが良かった。隊員はそれぞれに地道な取組を工夫しながら行っているんだと感じた。
8月18日(日)	ダルエスサラームに移動	リゾート地バガモヨをあとにし、ダルに戻る。途中日本が手がけた道路を通った。中央分離帯が設置されていて、きっと見えない部分の道路の質も設備もきちんとしているのだと想像させる道路だった。中国のように質よりも道路の長さで勝負なのか、日本のように距離は短いが何年も使える質の良い道路を作るのか、タンザニアのニーズは？と考えさせられた。
8月18日(日)	教材等購入	日本に帰って教材となりそうなものを探したが、うまく見つけられない。やはり授業プランをたてていないと時間や場所を有効に使うことは難しい。
8月18日(日)	本日の振り返り	ファシリテーターの小野さんからそれぞれの授業プランを話すよう指示される。まだぼんやりとしているプランを明確にする必要があると焦る。交流の最終確認を行う。
8月19日(月)	キパンランガンダ中等学校 米澤隊員	グループに分かれ交流授業をさせてもらう。日本の紹介を行い兜づくり、習字、アンケートなど行う。言葉は全ては通じないけれど子どもに何かを伝えるという本質は変わらない。とても充実した時間だった。その後校庭にて多くの生徒と交流。ソーラン節は生徒も一緒にやってくれ楽しい時間がもてた。米澤隊員は校長先生からの信頼も厚く、スワヒリ語と英語を駆使した授業は落ち着いた雰囲気でも子供達との対話もあり素晴らしかった。
8月19日(月)	教材等購入	いわゆるスーパーマーケットで現地の人生活をうかがい知ることができる場だった。日本の物とあまり変わらない印象を受けた。ウガリの粉など教材になるものを買えた人もいた。
8月19日(月)	本日の振り返り	情報の整理とそれぞれの授業案について発表した。事前の研修の時よりそれぞれの考えが深まっていることが感じられた。
8月20日(火)	JICA タンザニア事務所 報告会	それぞれが感じた10日間を報告した。人それぞれに視点は違ったが学びが大きいことは共通していた。JICA 事務

		<p>所の方々は我々の報告に真剣に耳を傾けてくれ、JICA が いかに教育に力を入れているかを垣間見た気がした。 我々のために忙しい時間を割いてくださった JICA 所長さ ん始めみなさんへの恩返しという意味でも、自分にできる 社会貢献、自分の役割は教員という立場にあることをひし ひしと感じた。</p>
8月20日(火)	在タンザニア日本大 使館 表敬訪問	<p>岡田大使が「日本という枠の中で守られて幸せに暮らせる 時代は終わった。才能やビジネスの基礎知識さえあれば日 本人は世界のどこでも活躍できるからどんどん世界へ出て 行ってほしい。」と言われたのが心に残る。世界を知る方の 言葉は重みがある。子供達に伝えたいことの一つである。</p>
8月20日(火) -21日(水)	タンザニアから日本 までの移動中および 日本到着	<p>ダルの空港で見えなくなるまで最後の最後まで見送って くださった足立さん。そのお心遣いがとても嬉しく心が温か くなる。足立さんの温かさは日本人だからなのだろうか。 どうぞどうぞこれからもお元気で。タンザニアは遠くにあ る近い国、タンザニア人は地球に暮らす仲間だと心から感 じながら帰途につく。</p>